

嶺井勇盛さん

1932(昭和7)年7月1日生まれ

民間人

所属 玉城国民学校6年生

戦地 玉城村字奥武(あざおう)
(現南城市)



●1944(昭和19)年7月 日本軍が玉城(たまぐすく)に駐屯

軍隊が学校の校舎に入ったので、学校は近くの集落の事務所(公民館)に移転になった。1週間でまたこの事務所にも軍が入るということで、大きな民家に移動させられた。ここも4~5日したら軍が入ると、今度は5~6キロ離れたところへ移動した。

この頃から高学年は兵隊に混じって陣地構築。今日はこっち、5~6日経つと今度はあっち。もっこや、ざるに土を入れ運ぶ。今日もこれかとは思ったけど、特に嫌だという感じはなかった。イクサだというのがあるもんだから、協力しないといけないと、ぐずぐず言う人はいない。軍に芋と芋づるの供出があった。芋づるも何枚と数えて供出した。

●1945(昭和20)年3月23日 艦砲射撃が始まる

卒業式の日だった。米軍上陸は港川からあると思っていたので、すぐそこだと右往左往、奥武島(おうじま)内の観音洞に避難したが洞が砲撃で揺れる。夕方壕を出て、本島に渡り、公式避難場となっていた現・琉球カントリーの壕に避難した。

まさかそんな長期戦になるとは思っていなかったの、朝炊いたさつまいもを2~3日分持参しただけ。あとは生味噌。幸い壕内に井泉があったので助かった。最初はサツマイモ食べ、無くなったら1日1食。食べない日もあるし、そういう場合は琉球黒糖を食べ、水を飲んだ。

壕内は上からしずくが垂れ、下は石ころで座ることもできない。サウキビの枯葉を採って来てひいたが、水を吸い込んでいつもジメジメ。虱が発生した。

●スパイの嫌疑をかけられる

一番恐かったのは今から話すこと。避難後1週間ぐらいで自宅にもものを取りに帰った。

家は閉めて出たが開いている。おかしいなと思ってそろそろ入ったら、2人の日本兵が「こら待てっ！ 貴様らスパイだろう！」銃を胸に構えて、今にも刺しかかりそう。「違う、自分の家です」と言っても、「言い訳するな」。親父は沖縄語で「逃げろ」と背中に僕を庇って逃げようとしたら、兵隊は今度は後ろに廻って、「坊主、本当にお前のうちか?!」とつさに親父の脇の下から床の間にあった写真が見えて、「はいっ」と言っ、写真のほうを指差したんですよ。電灯みたいなんで照らして、この人たちのうちに間違いのないようになって難を逃れたんですよ。

私は学校に行ってたけれど、親父は明治の生まれだから学校も4年ぐらいで、日本語(標準語)が話せないから疑われた。旧玉城村内でも三つ四つ先輩で殺された例があったと聞く。

●同年6月 米軍が進行して来るといことで壕から出る

南部に逃げた人も、奥武島に戻った人もバラバラ。南部に行った人は皆亡くなった。私たちは更に山の中に逃げた。見つけた壕を大雨で離れて、再び戻ると、もう3~4名、日本兵が入っている。うっかり声をかけたらやられるので、最後は自分の家しかないと島のうちに戻った。夜は自宅で、昼は島内の山中で過ごす。

3~4日すると橋が爆破され本島に渡れなくなった。この時、魚が死んでたくさん浮いて、夕方採りにいき料理をし、3ヶ月ぶりに味噌汁を飲んだ。こっち(島)に来て良かったなあとと思った。

●同年6月半ば 米軍が奥武島に上陸

山の中から米の大軍が見えた。住民は東の方に逃げ回る。手をあげて出てきなさいと放送がかかったが、皆恐がって誰も出ていかない。漁師は7~8名海に飛び込んだ。

私も妹を引っ張って飛び込もうとしたが、親父に止められた。現区長の母方のお爺さんがハワイ帰りで、「米兵は何もしない。出てちょうだい」と言う声を聞いて、みな安心して出る事になった。

船で対岸に渡り、軽トラで2~3台分の人数。対岸で歩行困難のおばあちゃんが米兵に殺された。人に支えられて、望みがないということなんだろう。自分が聞いたのは音だけ。でもやられたんだと皆言って、これは年寄りから順に射殺するんだと思っていた。

トラックで百名(ひゃくな)に行くと民間人が自由にあっちこっち動き回っている。僕らだけが捕虜じゃないんだな、僕らが(捕虜になった)最後なんだなあとというのがありまして、安心した。志喜屋(しきや)まで行って解放された。

(取材日:2013年2月5日)